

## 第7回平和に関する市民勉強会議事録

文責：浜田

【日時】2007年9月2日(日)13:30～15:30

【場所】かしはら万葉ホール3階会議室

【参加者数】14名

【テーマ】正しい戦争はあるか

【概要】奈良女子大学文学部 柳澤有吾先生に「現代の正戦論」と題した問題提起の話をしていただき、その後、「正しい戦争はあるか」について参加者全員で話し合いを行なった。

### 【勉強会内容】

[1] 問題提起：『現代の正戦論』～「アメリカからの手紙」と「アメリカへの手紙」～

(1) はじめに(自己紹介を兼ねて)

- ・ 哲学の学者の研究をやった後、生命倫理、障害者差別(生殖医療での中絶等)環境倫理について考えてきた。
- ・ 戦争倫理について取り組んだのは最近だが、思うところは昔からあった。1991年から93年までドイツに留学した。当時はユーゴ内戦の真っ只中で、TVでは戦争が常にトップニュースだった。その放送を一視聴者として見ながら、なぜ、NATOやアメリカはこんな状態をいつまでも放っておくのかという気持ちは募った。
- ・ 数年前、日本への原爆投下に関する論文を書いた。日本では絶対的に否定される原爆が、アメリカでは「100万人の命を救った(良い)原爆」という見方もあることに驚かされた。  
当時、スミソニアン博物館で原爆展示の企画があった。その時にアメリカの在郷軍人会が展示の仕方にクレームを付けた。原爆は戦争を早く終わらせ、アメリカ人だけでなく日本人の命をも救った偉業であるにもかかわらず、悲惨な状況を展示するのはその偉業を汚すものだという主張だった。これに対して反対意見も含めて米国内で激しい議論になった。しかし、日本では絶対否定論が表に立ち、米国での議論を受けた議論はほとんどなかった。
- ・ そもそも原爆は他の爆弾と違うのか、なぜ原爆は非難されるのか、原爆投下を肯定する人たちの根拠は何かを考えていくと、正しい戦争という考え方に行き当たる。原爆投下が正しかったという時の「正しさ」とはいったい何なのかが問題になる。
- ・ 無差別爆撃の問題を考える時、ある時期から軍人以外の非戦闘員をターゲットにしないという重要なルールがあった。そのルールに則ったなら原爆は確実に正しくない。しかし第2次大戦の終りには無差別爆撃は当たり前のように行なわれた。その頂点が原爆であったと考えると、非戦闘員の扱いは普遍的な問題ではないかと考えている。9・11やそれに続くアフガニスタン、イラクでも同じことが問題になっている。

(2) アメリカからの手紙

- ・ 2001年の9・11同時多発テロとその後のアフガニスタン戦争について、「私たちは何のために戦っているのか - アメリカからの手紙 - 」という声明を、S・ハンチントン(「文明の衝突」の著者)、F・フクヤマ(「歴史の終り」の著者)、M・ウォルツァー(正戦論で著名)らが発表した。米国政府の政策を支持する内容なので表面的には御用学者の集まりとも見られてしまうが、実際はそれほど単純でなく、もっともと思えることも書かれており議論の余地のある内容になっている。その一部を取り上げて考えたい。  
また、「アメリカからの手紙」への反論として、ドイツ、サウジアラビア、米国の内部から「ア

リカへの手紙」が寄せられた。これも一部を取り上げ、そこで何が問われたかをはっきりさせた  
い。

[ アメリカからの手紙の内容 ]

- ・ 戦争は政治的失敗の印であり、戦争防止のため出来る限りのことをする義務を認識している。しかし、悪を阻止することが最も重要な時があり、戦争に訴えることが必要な場合もある。それが今である。ただし、全ての戦争を肯定する「現実主義」(下記参照)は認めない。(正しい戦争という土俵で話を進めている。)

戦争に対する立場を次のように整理する

|       |  |
|-------|--|
| 無差別主義 | { (絶対的) 平和主義・・・全ての戦争を否定<br>現実主義・・・全ての戦争を肯定 |
| 差別主義  |  |

- ・ 戦争に踏み切っても良い場合の第一は、無辜(ムコ)の人々を危害から守ること。ただし、武力に訴えなくても良い可能性があれば非暴力的手段を取るべきである。しかし、攻撃者が抑えがたい敵意に突き動かされている場合は武力行使が正当化される(9・11を念頭に置いている)
- ・ 戦闘員以外を攻撃してはいけない。しかし、戦闘員を目標にした爆撃による意図しない非戦闘員の死はありうる。

(3) アメリカへの手紙

- ・ 「アメリカからの手紙」に対して、ドイツから「アメリカへの手紙」が送られた(2002年5月)。アフガニスタンへの爆撃の結果、4千人以上のアフガニスタン一般市民の命が奪われている。無辜の人々を守るという考えはアフガニスタン一般市民には当てはまらないのか。
- ・ 上記に対し、「アメリカからの手紙」第2信が出された。9・11の犠牲者とアフガニスタン市民の死者を一緒にしてはいけない。9・11はオフィスを計画的に狙って多くの命を奪ったのに対し、アフガニスタンでの死は、市民の死者を極力出さないようにした目的の中での意図しない死(うっかり殺してしまった)である。両者は理由も目的も異なっている。
- ・ さらにこれに対してドイツから第2信が送られた。9・11で計画的に殺された人々とアフガニスタンでうっかり殺された人々とに道徳的な重みに違いがあるのか。正しい戦争という言葉が乱用され、言い訳や合理化に利用されているだけではないか。

(4) まとめ

- ・ 「正戦論」は全ての戦争は正しいという考えを否定し一つのハードルを設けてはいるが、戦争の正当化に利用される結果になっている。
- ・ 現在は映像を通して世界のことが伝えられる。最初に伝えられるのは決して低い視線のものではない(空爆のような高いところからの視点であって、生活の中からの視点は見えない)
- ・ ピンポイント爆撃が100%命中しているわけではない。外れた場合に起こっていることは見えない。見えないものを想像すること、これは私たちの課題である。
- ・ 「正しい」と最初に掲げられた戦争に「正しさ」はない。もしかしたら、やむをえなかったと後から考えられる戦争はあるかもしれない。しかし、それを最初から先取りして正当化することは許されない。

## [ 2 ] 質疑応答と議論

\* 個人名は記入していません。以下の ( ) 内のアルファベットが同じ発言は同じ方の発言です。

- ( A ) 平和状態を回復するためのやむをえない力の行使は認めるというのが平和主義で、善のための力の行使が許されるというのが正戦論であるなら、両者は同じ議論に思えるが違いは何か。
- ( Y ) 目的と目的達成のための手段を区別して考える必要がある。先ほど説明した絶対的平和主義は平和を目的とするだけでなく、平和的手段しか認めないので力の行使は否定している。正戦論は必要に応じて武力行使を認めるので、両者には大きな違いがある。
- ( A ) 「アメリカからの手紙」では制裁や復讐を認めていない主張になっているが、9・11後のアメリカ人の感情は制裁や復讐だったと思う。この感情が正戦論に置き換わっているが、そのことにアメリカ人は気づいているのだろうか。
- ( Y ) 感情レベルで行なわれたことを支持する人たちもいて、正戦論に名目を与えている面もある。一方で米国内に自己批判する人たちもいることも事実である。
- ( A ) 自己防衛の延長としての復讐というのは個人レベルであり得ると思っている。その場合、相手の方が強い時には、抑圧されている側は戦っても良いのではないか。その意味で、米国とアフガニスタンの場合、どちらが正しいというより以前に、圧倒的な力の差のある状態で力を行って良いのか、という疑問を持つ。
- ( Y ) 今の話の中に重要な点がいくつかあった。  
まず、個人間の話と国家間の話をごとまで比喩として語れるかという課題がある。  
次に圧倒的に力の差がある場合のことだが、テロは圧倒的に弱い側の唯一の手段だというのがテロを行なう側の論理になっている。強いものに対して暴力をふるっても良いということになると、テロリズムをどう否定するかという課題が残る。
- ( B ) 私は戦時中、中国に行っており、12歳の時、昭和20年の3月に内地に戻ってきた。満州でも中国でも日本の軍隊は内地に戻ってきていて、私の場合は姉が領事館にいたのでそのことを早めに知って引き揚げてきた。当時東シナ海は戦争の真っ只中である。引き揚げる際、船は危険だということで車で移動して途中から赤十字の旗を掲げた貨物船で陸伝いに移動したが、毎日空襲に遭い上海に着いたのは私の乗る1隻だけだった。  
戦争は必ず一般人が酷い目に遭う。戦争は絶対にあってはいけないし正当化されるべきでない。
- ( C ) アメリカの学者たちが書いた戦争の言い訳を資料として「正しい戦争はあるか」という議論をしようとしているが、「正しい戦争などない」と思い知るためにこの資料を紹介されたのか。  
この会には「正しい戦争などない」と皆が思って集まってきているのではないのか。
- ( D ) (会の主催者として) この会は議論することを目的としており、「正しい戦争はある」と考えている人も「正しい戦争はない」と考えている人もこの場においてかまわないし、両方の考えの方が今日の参加者の中にいると思う。
- ( E ) 私の父は軍人で中国に戦争に行き負傷して帰ってきた。軍人の時の写真は見せてもらったことがあるが、それ以外中国で何が行なわれていたかなど戦争の話は全く聞いたことがない。  
今日の話の中で、「戦争は政治の失敗」という言葉があった。その通りだと思う。今、国連は何のためにあるのか。現在の戦争は国連の失敗ではないか。常任理事国という大国の考えに支配されている。  
アメリカは朝鮮戦争、ベトナム戦争を始め、無差別攻撃を行なっている。しかし日本はアメリカに対して何も主張できていない。経済大国ではあっても中身は貧しい国だと感じる。私は戦争に反対で、

国連中心の非暴力の立場で問題解決に当たってほしい。

- ( F ) 国連中心の平和主義は無力化しており信頼できない。それはアメリカが中心になっていてアメリカの暴走を止められないからだ。各民族が協定できるような国連に代わる平和策を作れないものだろうか。
- ( A ) 世界的規模での戦争犯罪を裁く裁判所や警察権を行使する機関を求めていく感覚と、現状の国連を肯定できるかという議論には食い違いがある。
- ( G ) 今日参加するにあたって、どういう議論をするのかという点で2つのイメージを持っていた。一つは今日話があった国家レベルでの問題、もう一つは個人の意識の中で好戦的な感情はどのようにして起こるかという問題である。どうしたら日々の幸せを確固たるものにできるかという点から、どういう議論をしたら良いのかを考えているが、今は何のためにこういう議論をしているのか疑問を持つ。
- ( H ) 問題提起の中で、「後から考えて正しかったという戦争はあるかもしれない」という話をされたが、そうであれば、手段として正しい戦争はあるという立場になり、絶対的平和主義とは対立する考えになる。「後から考えて正しかったという戦争」とは、何を念頭に置いているのかを知りたい。
- ( Y ) 先ほどの話では「後から見てやむをえなかったと考えられる戦争はあるかもしれない」と言った。
- ( F ) 日本が行なった戦争はやむをえなかった戦争だと思う。
- ( B ) それは日本から見てやむをえなかったという意味か。
- ( F ) 日本からだけでなく海外からもそう思われている。マッカーサーもそう言っている。
- ( H ) 一つ一つの事柄がやむをえなかったかどうかという議論は難しく、水掛け論になってしまって今結論が出る話ではない。まず、やむをえなかったという理由で肯定することがありうるのか、ということを開きかけた。今のお答えではあるかもしれないということだった。
- ( Y ) 裏側から言うと、やむをえなかったと言い切れるものはない、と言ってよい。
- ( B ) 私もやむをえなかったと言い切れる戦争はないと思う。それは戦争に勝った側が使う論理だ。
- ( F ) 歴史は勝者が書いている面がある。書かれていない部分を掘り起こしていくことを世界中でおこなっていけば戦争を抑制する力になるのではないか。
- ( B ) 戦争を起こした人たちは何とも思っていない。先の戦争では、日本の庶民だけでなく、朝鮮人、中国人、台湾人も巻き込まれた。
- ( C ) 戦争しようという人は一部で、そうでない人が被害を受ける。
- ( I ) 「アメリカからの手紙」はアメリカの都合の良いように書いていると思った。原爆の被害を受けた人々がたくさんおり、9・11でも無実の人たちが犠牲になり、アフガニスタン、イラクでも多くの一般人が亡くなっている。いずれの戦争も正当化されるべきでない。
- ( D ) 今回、「正しい戦争はあるか」というテーマを掲げた。その中で正戦論を扱うと、正しい戦争という考えを認めることになると感じる方もいると思うので、このテーマを選んだ私なりの理由を少し話したい。1991年の湾岸戦争の際、日本の平和主義はあまりにも弱かったと感じている。イラクがクウェートを侵略した時にこのまま何もしないで良いのか、と問われて一気に崩れた。戦争に反対する考えの一部を否定されたことによって全部が否定されたかのように流されてしまい、アフガニスタン戦争、イラク戦争に引き継がれてしまった。たとえ湾岸戦争を認めても、同じ理屈でイラク戦争は認めることは出来ないはずだ。そして、間違っただけの戦争をはっきり指摘して、それに対して強く反対していくことが重要と考えている。
- ( J ) 戦争をやる側は全部正しいと思っているに決まっている。一方、反対する人は全部に反対する。だからこういう話をしても仕方ないかもしれないという気もしている。ただ、戦争は嫌だというだけでは戦争を止められない。それは戦争を認める人に届かず、説得する力を

持たない。それで戦争は絶対だめだということを論理的に説明する言葉を考えている。戦争が絶対に行なってはいけないのは、「個人の生活がだめになるから」だ。

戦争は勝手に起きるものではなく起こすものだから、やらなければなくなるものだ。

(K) 絶対的平和主義の立場に立っているが、戦争をする側の論理を勉強して反論する必要があるので、今回のお話は良かったと思う。

人類は国連を通して、戦争するルール、してはいけないルールを決めてきた。しかし、イラク戦争ではアメリカが国連決議を無視する形になった。正戦論の考えから言ってもアメリカは間違っていたと思うがどうか。

(Y) アメリカは湾岸戦争当時の国連決議などから国連のお墨付きを得ていると主張している。もちろん反対する側からは、そこまで許容していないなどの反論がなされている。アメリカのやっていることは単独行動主義(ユニラテリズム)だといって批判され、アメリカと言えども好き勝手できる状況にはない。ただ、理由付けがかなり怪しくても通ってしまう国連の弱さ、国際世論の弱さがある。

(K) 国連が一定の足かせになっていることとアメリカが手続きを守っていないことを、もっと言っていけば良いと思う。

(L) 絶対的平和主義でいきたいと考えているが、そのことを議論する下地がなく感情でしか反論できない。正しい戦争があるという主張も含めていろいろな話を聞いて、しっかりした議論ができるようにしたいと思う。

また、忙しくて参加できない多くの人たちに参加してもらえるようにすることが課題と思っている。

(Y) 戦争を経験してこられた方だけでなく、戦後世代の中に戦争は嫌だという強い気持ちがあることを大事にしたい。一方で、人道的介入と呼ばれるユーゴ空爆があった。ユーゴで大虐殺があり、日々人が死んでいった。そういう状況の下で戦争は良くないから何もしないということで良いのかというジレンマがある。

何もしなくても人が死んでいく、手を出せば戦争で人が死ぬ。そこで行なう空爆は正しいのか、正しくないのか、そしてその場合の正しいという言葉に悩む。人が死ぬという意味ではどちらも正しくない。正しくないけれどやらなければならないことはあるのか。それはやむをえないという意味で正しいのか。どちらを取っても罪が残る。そういう状況で何をするか。

今日は絶対的平和主義の意見が多く心強いことではあるが、もしそれだけで世界がうまくいかないとしたらジレンマにどう向き合っていくのか。そういう時に何を正しいと呼んでいいのか、を考えていかななくてはならない。それが私の課題でもあり、できれば皆さんにも考えてもらいたい。

以上

次回予定

【日時】2007年12月22日(日)14:30~16:30

【場所】奈良社会福祉総合センター6階第3会議室

【内容】調整中